ISSN 0915-8863

2003年3月1日 No.116

文部科学省

国立天文台ニュース

National Astronomical Observatory

天文学研究協力協定

3月号

国立天文台　広報普及委員会　TEL（0422）34-3958
〒181-8588　三鷹市大沢 2−21−1　FAX（0422）34-3690
ホームページ http : //www. nao. ac. jp

目　次

表紙 …… **1**

国立天文台カレンダー …… **2**

退官のご挨拶 …… **3**

・パソコン、ピンポン、メーデー・・・
位置天文・天体力学研究系　八百　洋子

・光陰矢のごとし
位置天文・天体力学研究系　木下　　宙

・高角度分解能観測
地球回転研究系　佐藤　弘一

お知らせ …… **6**

★日中天文学協定の調印
各分野で中国天文代表団と有意義な協議

★平成14年度総合防災訓練（三鷹地区）の実施について

★すばるユーザーズミーティング報告

★天文学に関する技術シンポジウム報告

★第13回「岡山天体物理観測所観測協力連絡協議会」報告

★岡山天体物理観測所特別天体観望会のご案内

エッセイ ……**10**

出会い～生き様
水沢観測センター　千葉　　成

編集後記 ……**11**

シリーズ　メシエ天体ツアー ⑨ ……**12**

M33～M36
広報普及室　教務補佐員　小野　智子

国立天文台カレンダー

2003年

〈2月〉

8日(土) 総研大天文科学専攻入試（第2回）
10日(月) 理論・計算機専門委員会
12日(水) ～14日(金) 会計実地検査
20日(木) 教授会議
27日(木) 総研大教授会
28日(金) 総研大数物科学研究科入試選抜
第2回合格者発表

〈3月〉

17日(月) 運営協議員会
24日(月) 総研大学位授与式
24日(月) ～26日(水)日本天文学会春季年会
（東北大学川内キャンパス）

表紙の説明

11月26日に国立天文台に於いて交わされた日中天文学協定調印式後の出席者との記念写真。
詳しくは、本文を参照。

退官のご挨拶

＊パソコン、ピンポン、メーデー …＊

位置天文・天体力学研究系
八百　洋子

今から40年前の５月、面接のため、初めて訪れた天文台は本館も木造で、今よりずっと多くの緑に覆われていました。当時、都心の商社に勤めていた私にとっては「それで、人はどこにいるの？」と思うくらいの静けさでした。

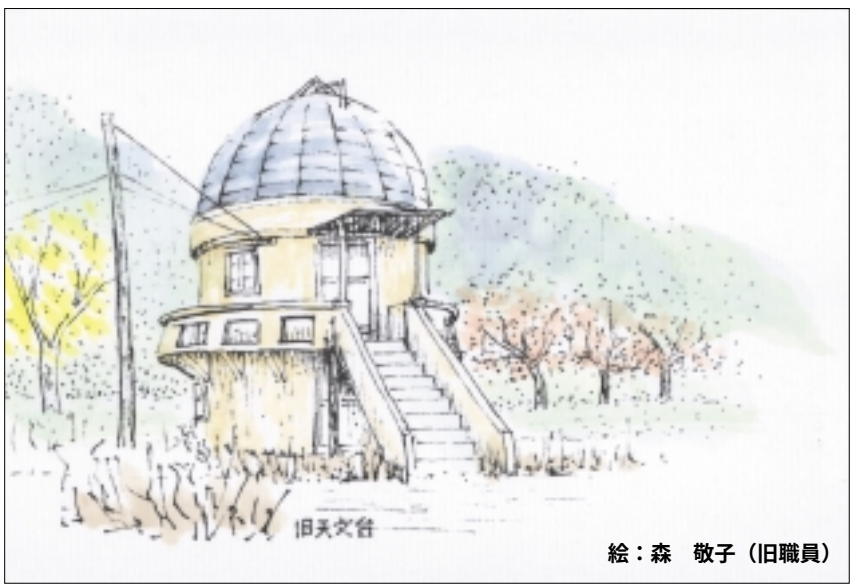
１年ばかりの商社勤務をやめ、天文台に入ったのは面接後１ヶ月のこと。研究所のようなところに転職したいと思っていた私が、こんなにスムーズに、とらばーゆ出来たのも、当時、測光部で研究されていた田鍋浩義先生のご紹介の賜物であり、感謝は尽きません。

初めは、静かなだけと思えた木々の芽吹きや紅葉の美しさに、年ごと目を見張りつつ、40年の時が経ちました。

☆　　☆　　☆

その40年を振返り、「天文台にいたからこそ出来たことは何だっただろう」と考えてみた。

もし、天文台にいなかったなら、今のようにパソコンに慣れることはなかっただろう。パソコンを使わずに、定年まで何とか逃げ切ろうと思っていたのは、いつ頃だっただろう。絶対覚えられないと思えたパソコン。さらにそれ以前、英文タイプの集中作業で痛めた手や肩を、又悪くするのではないかとの恐れ等々があった。



絵：森　敬子（旧職員）

それが今では友人の前で、パソコンを使い仕事をしていることをさりげなく自慢にしているのだから。守備範囲と言えば、高々研究室事務に必要なエクセルをほんの少しとメール程度のものなのに。それも、ド素人の私に分かるように教えてくださった方があったからこそのこと。改めてお礼を述べたい。本当にありがとう！

もし、天文台にいなかったなら、ピンポンの試合に出場し、しかも勝つということはなかっただろう。東京天文台時代、東大の総長杯卓球大会に人が足りないので出てほしいと頼まれた。単にうまく断れなかったというだけで、運動会を除けば生まれて初めてのスポーツ大会出場となったのである。会場はオリンピック記念青少年総合センターだった。

実力は素晴らしかった！何しろ、ラケットに球が当たった記憶がない、通り抜けた球を拾いに走った覚えもない。「誰がこんな人に出てくれって頼んだのだ（かわいそうではないか！）」と言ってくれたＳ氏の言葉は、今でも廊下ですれ違うたびに思い出す。会場が東大、竜岡門近くの文京総合体育館に移ってからも、素晴らしいピンポンは変わらなかった。

ところが、時が経ち、勝つ事もあるようになったのである！天は小さき力も見捨て給わずというところか。勝ったせいもあり、総長杯は一層、懐かしい思い出になった。試合の合間を縫って、みんなでお弁当を開いた観覧席。大会が初冬にかかった時は、かじかむ手をこすりながら待った自分の出番。楽しみだった優勝決定戦のエース対決。両エースの力と技は勝ち負けを超えて、いつも魅力的だった・・・。

もし、天文台にいなかったなら、働く者の祭典、メーデーに行くことはなかっただろう。私が懐かしく思い出すメーデーは代々木中央会場に集まり、その後、おしゃれな原宿の街をスタートし、国会や官庁街を経て、終点、土橋（新橋）までデモ行進する頃のものである。初めて参加したのは、入

台後、２～３年のことだったと思う。誘われた時、すぐ、記録映画で見たメーデー事件のことを思い出し、何かあったらどう逃げようかと考えたりもした。それにしては、以後毎年よく行ったものだと思う。

５月の空に映える新緑と、ひときわ大きな天文台の旗。上も下もない和やかな雰囲気。そして、解散後の乾杯。どれもみな、懐かしい。

振返ると、再任用の１年を含め、40年の間にあった天文台の快挙のニュースは嬉しかった。これからも、まるで自分の手柄のように喜ぶに違いない・・・。

☆　　☆　　☆

最後になりましたが、天文台の益々の発展とそれを支える皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げます。

＊光陰矢のごとし＊

位置天文・天体力学研究系
教授　木下　宙

時間がたつのが速いことを意味する４文字熟語「光陰如箭」（光陰矢のごとし）を２つの意味で感じるこの頃である。

私が1967年に東京天文台（このときは東京大学の付属天文台）に入台以来36年が過ぎ、月日がたつのが速いという実感は熟語の意味と一致する。もうひとつは私が主として研究してきた太陽系天体の数値シミュレーションのタイムスケールが加速度的に長くなってきたことである。

わたしが初めて天文学会に出席した1960年代後半の日本における小惑星の数値シミュレーションの時間スケールはたったの数百年であった。1973年に米国で外惑星（木、土、天、海、冥）の100万年の数値シミュレーションが実行されたのにはオーバーな表現であるが驚愕した。ちなみに天文に関連することで最初に驚愕したのは1957年のソ連（現在のロシア）による人工衛星打ち上げであった。

この米国の百万年の数値シミュレーション記録を破ったのは、1984年に冥王星の長期安定性を調べることを目的とした私と中井宏氏による外惑星系の５百万年数値シミュレーションであった。この後の太陽系惑星系の長期間数値シミュレーションのタイムスケールの伸びは指数関数的に長くなり、1995年には私と中井宏氏が外惑星系の軌道計算をパソコンで50億年まで延長した。さらに本台の伊藤孝士氏は太陽系９惑星を宇宙年齢スケールで数値シミュレーションし、この時間スケールでは我が太陽系は安定で存続することを明らかにした。（ただし数学的には我が惑星系のリアプノフ指数が正であるという意味ではカオス的であるが、宇宙年齢タイムスケールではカオスは現れない）。

我が太陽系の惑星系の安定性の問題はほぼ解決したが、小天体の力学についてはまだまだ面白い問題が山積している。特に最近続々と太陽系外縁部で発見されているエッヂワース・カイパーベルト天体、巨大外惑星の逆行衛星の軌道力学にはチャレンジングな問題が多くある。

また、最近ドップラー観測から続々と発見されている異形な太陽系外の惑星系が、新たなタイプの興味ある力学の問題を、我々に突きつけている。これらの異形の惑星系の中には平均運動共鳴、近星点の連動などのメカニズムで惑星系が安定化されているものがある。これらの安定メカニズムは、我が太陽系惑星系では見られないものである。これからの観測の進歩とともに新たな異形の惑星系が発見され、天体力学が威力を発揮する場面が多くなることを期待している。

＊高角度分解能観測＊

地球回転研究系
助教授　佐藤　弘一

緯度観測所に就職のため、雪の水沢駅に降り立ったのは、1968年１月の初めのことでした。この就職が決まった事を家族に話した時に、母は非常に喜んでくれました。母の女学校時代の先生が水沢出身で、“世界に冠たる”緯度観測所のことをよく聞かされていたらしい。早いもので、その母も３年前に亡くなり、自分も定年を迎えました。

緯度観測所に就職して、計算機の運用に、その後眼視天頂儀、浮遊天頂儀、写真天頂筒等の観測、運用にたずさわりました。そのかたわら、大学院生の時に北村正利先生の指導で始めた食変光星の観測研究を進め、学位論文としてまとめました。その頃には、従来の光学観測による地球回転観測も、その角度分解能から将来があやぶまれていました。当時、宇宙技術と呼ばれた人工衛星のドップラー観測およびレーザー測距、月のレーザー測距、超長基線電波干渉計（VLBI）等から高角度分解能で地球回転も求められる事がわかり、その研究が始まりつつあったのです。そのようななかで、1977年から1978年にかけて１年間、アメリカ合衆国海軍天文台で研究する機会を与えられました。緯度観測所でも、２桁以上の角度分解能向上の見込めるVLBIを次期観測装置として採用すべきとの思いを深くして帰国し、VLBI装置の検討、電波望遠鏡の実験を始めました。しかし、VLBIのような大型観測装置は、緯度観測所という現状の組織では実現不可能ということも言われていました。

1988年には、緯度観測所は東京天文台と合流して、国立天文台に改組されました。そして、2002年になってやっと、天文広域精測望遠鏡（VERA）としてVLBI装置が完成しました。1980年初め頃から、光干渉計による恒星の高角度分解能観測も考え始めました。1985年には、科学研究費補助金を得て実験を始め、その後はこちらの研究にどっぷりと浸かってしまいました。1992年には、勤務地を三鷹に移し、光干渉計（MIRA計画）の開発研究にたずさわってきました。2002年になって、基線長30mの２素子の光干渉計で恒星の干渉縞検出までこぎつけました。電波干渉計（VERA）、光干渉計（MIRA）とも、天文学的観測結果がでるのはこれからですが、それらの観測から未知の宇宙の姿が明らかにされることを、隠居後の楽しみにしよう。

私が天文学に興味を持ったのは、小学校高学年のころでした。中学校では、口径６cmほどの望遠鏡で毎日のように太陽黒点の観測をおこないました。その時いっしょに観測していた友人も京都大学に学び、名古屋大学で天文学の研究を続けてきました。少年の頃の夢であった天文学の研究にたずさわる事ができたのは幸いでした。しかし、自分のいたらなさを考えますと、皆様に多大のご迷惑をかけたことと思います。ここまでやってこられたのもひとえに皆様のおかげであり、感謝し、御礼申し上げます。

――春の日に三鷹の里にて詠める：
武蔵野の三鷹の里の桜花上野の他に
かかるべしとは（弘坊法師）。

雨にも負けず、風にも負けず・・・、
雪にも耐えて・・・（木村栄先生胸像）。

お知らせ

★日中天文学協定の調印
各分野で中国天文代表団と有意義な協議

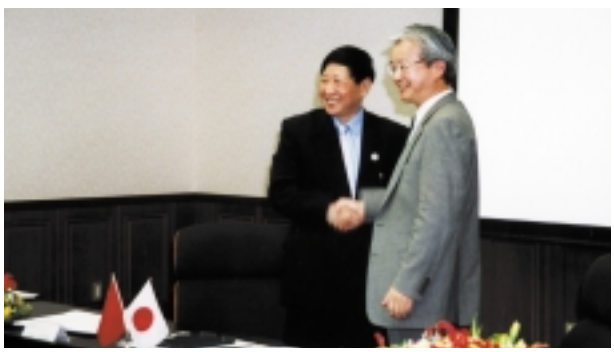
11月26日、国立天文台三鷹本部において、本格的な日中天文学協力協定が調印されました。海部国立天文台長と艾国祥 Ai Guo Xiang 中国国家天文台長が包括協力協定と ALMA 協力協定に署名、協力の発展を願い握手を交わしました（写真）。この後、艾台長によるセミナー（中国の天文学）、協力内容の全般的協議が行われました。

包括協力協定は、ミリ波サブミリ波、光赤外線、太陽物理、VLBI など天文学の広い分野における協力と、若手研究者の交流促進、またこれらを継続的に組織推進する組織委員会の設置をうたっています。また ALMA 協力協定は、日本が欧米との共同で進めている大型ミリ波サブミリ波干渉計計画への中国側の強い関心と、技術開発や観測での協力、将来の共同体制検討をうたっています。

中国では、これまでの科学研究組織を大幅に整理するとともに、数機関に分かれていた天文台を、研究費を統括する国家天文台（前身は北京天文台）と紫金山・上海の両天文台に統合しました。海部台長が3月に中国科学院の招きで訪中した際、北京における協議で日中の国立天文台が中心となって協力を進めることで合意し、その後、両国での準備を経て、今回の中国代表団の派遣・協定書の調印となったものです。来訪した中国代表団は、艾国祥中国国家天文台長、趙剛 Zhao Gang 国家天文台副台長、楊戟 Yang Ji 国家天文台副台長・紫金山天文台、洪暁瑜 Hong Xiaoyu 国家天文台副台長・上海天文台、李炎 Li Yan 国家天文台副台長・雲南／高美古天文台、陳維平 Chen Weiping 中国科学院副教授で、これまで日中の交流に尽くしてこられた劉彩品 Liu Caipin 紫金山天文台名誉教授（日本在住）も特別参加されました。

11月25日に来日、26日三鷹、27日に宇宙研から野辺山、28日野辺山から京都、29日岡山観測所、30日に福岡から帰国というハードスケジュールでしたが、それぞれの観測所での観察や、分野ごとの具体的な協力協議が進むなど、双方にとって大変実り多い訪問でした。また28日には、諏訪にある「時の博物館・儀象堂」に作られた、北宋時代の技術遺産である巨大な「水運渾儀」の復元模型を奥村館長の案内で見学し、大変印象深かったようです。

今回の協定の成立は、国際天文連合（IAU）や東アジア天文学会議（EAMA）、個別分野の協力など長期にわたって進められてきたアジアの天文学研究協力に、飛躍の扉を開くものです。赤外線望遠鏡の共同建設、サブミリ波ワークショップ、東アジア VLBI ネット、若手研究者の派遣など多くのテーマが具体的に検討されており、アジアの天文学共同に大きな流れをもたらすと期待されます。



調印後握手を交わす艾国祥中国国家天文台長と海部台長

★平成14年度総合防災訓練（三鷹地区）の実施について

平成14年11月6日（水）に、三鷹地区において平成14年度総合防災訓練が実施されました。今回は大地震発生により北研究棟1階講義室附近から火災が起きたと想定し、建物内の怪我人や逃げ遅れた者の捜索・救助訓練などとともに屋内消火栓を使用した動作確認による消火訓練などを行いました。

訓練当日は三鷹消防署、地元大沢原町会の消防団の参加を得て、本台の自主訓練と併せて、消防車による消火（散水）訓練、梯子車による逃げ遅れた者を屋上から救出する訓練などを行い、約100名の職員が参加し、大規模な災害などに備えて防災意識の一層の向上に努めました。

（管理部会計課管財係）

★すばるユーザーズミーティング報告

2002年度すばるユーザーズミーティングは、日本時間の12月19日から20日にかけて、国立天文台三鷹、解析研究棟1階大セミナー室で行われ、約120名の参加があった。口頭発表の大部分は三鷹、一部はヒロのハワイ観測所から行われた。PCを用いた発表に関しては、PCの画面を直接相手側のスクリーンに表示する手法を採用し、参加場所（三鷹 or ヒロ）によらず、質の高い表示を見ながら講演を聞くことが可能になった。初日は、主に観測所からの現状報告、２日目は、科学成果発表、観測所の将来計画、審査制度、広報活動に関する報告、議論が行われた。ポスターは、のべ45個の展示があった。聴衆の大部分が日本人、一部外国人であることが想定されたため、OHP、パワーポイントファイル、ポスターは基本的に英語で準備し、実際に話す言語は日本語という形式を取った。

現時点では、すばるの一般プログラムは、一課題につき最大３夜という上限があるが、2002年は、例外的にこの上限を超えた観測時間を割り当てる少数のプロジェクト（観測所プロジェクト、及び、インテンシブプログラム）が実行されている。これらの途中経過の報告も行われ、外国に対して、『これがすばるによる成果だ』と主張できるような研究成果が、近い将来生み出されることを期待させた。

最も活発な意見交換が行われたのは、ユーザーに直接関係する、審査制度に関してであった。観測夜数の上限の撤廃、変更に関する要望等が出されたが、議論のために用意していた35分では収束せず、途中で終了せざるを得なくなった。また、ガンマ線バーストのような突発現象が発生すると、当初予定されている観測をキャンセルして、観測が行われる。このTarget Of Opportunity（TOO）観測と呼ばれる観測が、すばるでも2002年より実行されており、これまでの結果、及び、今後の方向性に関する意見交換も行われた。その結果、TOO観測を続ける場合は、予定されていた観測者に対するしっかりとした補償が必要であるという点で、意見はほぼ一致していた。

懇親会にも約60名の参加があり、昨年に比べて大盛況であった。

（光学赤外線天文学・観測システム研究系　今西昌俊）

★天文学に関する技術シンポジウム報告

2002年12月12日（木）から13日（金）の２日間にわたって、佐久勤労者福祉センター他において『第22回天文学に関する技術シンポジウム』が開かれたので、その概要を報告する。

技術シンポジウムは、三鷹、野辺山、水沢、岡山、堂平、木曾などの各地区を交代にその地区の技術系職員が当番になり、毎年開かれている技術系職員主催の研究会である。今年は野辺山が当番になり、佐久市で開かれた。

技術シンポジウムの内容は、その年の当番地区の趣向で毎年工夫され、運営されてきた。あるときは部外から講師を呼び講演会を行い、またあるときは軽いスポーツ大会を取り入れるなど様々である。今年は、今までにない新しい試みとしてプログラムに一般の参加を可能とした公開講演会を組み入れた。

午後１時30分、中井野辺山宇宙電波観測所長の開会の挨拶があり、引き続き口頭発表が始まった。国立天文台三鷹の田村氏の「気球観測用太陽センサの製作」をトップに国立天文台三鷹、同ハワイ、東大・木曾観測所、国立天文台三鷹、同水沢の職員の講演が続く。普段はそれぞれ専門のプロジェクトに属してそれぞれの仕事に専念しているため、横の情報はほとんどないので、全国の観測所の現在の技術開発を知るうえで、この技術シンポジウムの役割は大きい。しかしながら、今回は、東大・木曾以外の大学・公開天文台等からの参加がなかったのはさみしい。

一日目の口頭発表の後に、今年は特別に「法人化問題懇談会」を設け、活発な討論を行った。法人化は避けて通れない焦眉の急の問題であり、新しい身分制度に切り替える際の移行措置、技術職員の定年制、技術職員の技術交流の推進、などについて活発な意見交換が行われたが、時間が限られているため続きは懇親会で行うこととして次のプログラムである公開講演会に移った。

ブラックホールの解説をする中井宇宙電波観測所長（公開講演会）

午後５時半から予定どおり、公開講演会が開かれた。開場前からすでに、２，３名の方が来て待機しており、関心の高さがうかがわれる。一般の参加者は 25 名、技術シンポ出席者の参加は 30 名である。講師は中井宇宙電波観測所長、演題は『ブラックホールとは何か』である。講師は脱出速度の話から、地球や太陽をブラックホールにしたらどうなるかを例にまず、ブラックホールの概念をやさしく説明し、見えないブラックホールがどうして分るかを自身が発見したM 106 の巨大質量ブラックホールを例に解説し、さらにブラックホールという不思議な天体について現在わかっていることとわからないことを紹介した。講演の終わったあと、「ブラックホールの中はどうなっているのか？」、「ブラックホールの中に人が落ちたらどうなるか？」など活発な質問が出て、大盛況であった。宇宙研究の最先端にふれ、一般の参加の方々の素朴な疑問にふれ、また感興を新たにしたひとときであった。

このあと、場所を変えて懇親会が開かれた。地域、職場の垣根を取り払い、互いに情報交換しつつ、親交を深め、大いに盛り上がったことは言うまでもない。

二日目は、午前中は国立天文台野辺山の坂本氏による「電波天文周波数保護業務の現状と問題点」を筆頭に数名の口頭発表が行なわれたあと、VERA, ALMA の各プロジェクトの進捗状況の報告があり、国立天文台岡山の小矢野氏から岡山の最近の状況について説明があった。最後に、宮地技術系職員会議代表の講評・挨拶をもって技術シンポジウムを締めくくった。

午後はエクスカーションで、雪の中、バスで宇宙科学研究所・臼田宇宙空間観測所まで登り、山田氏及び最近国立天文台野辺山から転勤された中島氏から施設の紹介、業務の説明をしてもらい、全日程を終了した。

例年になく、早い降雪でどうなることかと心配したものの、関係の方々そして参加の方々の多大なご協力により円滑に技術シンポジウムを開催することができた。関係各位に感謝したい。

（野辺山太陽電波観測所　技官　齋藤泰文）

衛星追尾卓の説明をする中島氏（臼田宇宙空間観測所）

★第 13 回「岡山天体物理観測所観測協力連絡協議会」報告

去る 11 月 1 日に岡山市において標記の連絡協議会が開かれました。この協議会は、観測所周辺の光害防止等を主たる目的として昭和 47 年に設置されたもので、観測所から半径 20km 以内にある自治体、商工会議所、企業など 42 団体から構成されています。会議はほぼ 2 年に一回のペースで開かれています。

当日は特別講師の方を含み 34 名の参加者があり、国立天文台からは台長はじめ４名が参加しました。まず、会議に先立ち、台長から挨拶があり、その中で出席の方々に日頃のご協力に対する謝辞が述べられました。次に議題に移り、まずは私の方から最近の岡山観測所の研究動向と光害の実態についての説明を行い、光害防止について今後ともより一層ご協力いただくよう要請いたしました。次に岡山県生活環境部から、平成 14 年４月に岡山県

が定めた「岡山県快適な環境の確保に関する条例」について説明がありました。この条例は県レベルの条例としては全国ではじめて光害防止について触れており、サーチライト等の屋外使用に関しては罰則も設けられている画期的なものです。このあと、特別講演として、元中京大学教授で、環境省光害対策委員会座長を務めておられる成定康平先生に、「光害のない照明をめざす」というテーマでご講演いただきました。照明の専門家としての見地から、照明システムの効率というものの基礎概念からご説明いただき、無駄を無くして照明率の高いシステムを作ることが光害防止につながるとの重要な示唆をいただきました。「光害防止の最善の方法は、照明システムのエネルギー効率を最大限に向上させ電力消費を減少させることである」との結論には、参加者の皆さんも納得されていたようでした。

この会議は、基本的に国立天文台が周辺自治体・企業にお願いをするという性格のものですが、観測所の研究や光害についてご理解いただき、光害悪化を防ぐ重要な拠り所となっており、今後とも継続して活動し、観測環境維持に努めていきたいと思います。

（岡山天体物理観測所長　吉田道利）

講演をする成定康平先生

★岡山天体物理観測所特別天体観望会のご案内

岡山天体物理観測所は、日本一大きな188cm反射望遠鏡による特別天体観望会を行います。観望会に参加をご希望される方は、事前の申し込みが必要になります。下記要項にしたがってご応募ください。

【日　時】

３月29日（土曜日）
午後７時以降、２時間程度
（観望時間　約30分、博物館　約30分）

【場　所】

岡山天体物理観測所、岡山天文博物館

【対　象】

小学生以上（小学生は保護者同伴のこと）

【天　体】

木星、土星等を予定

【定　員】

100名程度

【参加料】

無料

【申し込み】

往復ハガキに代表者の住所、氏名、年齢、電話連絡先のほかに、参加者全員の氏名、年齢を必ず記入のこと。参加者総数はハガキ１枚につき５名まで。３月７日（金曜日）必着。応募者多数の場合は抽選とさせていただき、３月16日（日）までに結果を連絡します。

【宛　先】

〒719-0232 岡山県浅口郡鴨方町大字本庄
岡山天体物理観測所 特別天体観望会係

【問い合わせ先】

国立天文台・岡山天体物理観測所
〒719-0232 岡山県浅口郡鴨方町大字本庄 3037-5
電話：0865 － 44 － 2155〔代表〕
（休祭日を除く月曜～金曜の９時より17時まで）
FAX：0865 － 44 － 2360
URL：http//www.cc.nao.ac.jp/oao

エッセイ

出会い～生き様

水沢観測センター
千葉　成

編集委員の方から天文台ニュースに何かと言われ、「はぁ～考えておきます」とは言ったものの格調高い天文台ニュース・・・まあ、とにかく今回は手っ取り早く「我が生き様」を大げさにさぐってみることにしました。

さて、人間この世に生を受けたときからアノ世に行くまで、実に数え切れないくらいの様々な出会いがあるものです。半世紀を過ぎた私の人生も人並みに「出会い」が「きっかけ」となりアレコレの始末。

そして、この沢山の出会いときっかけが人生を変えることは言うまでもないことです。天文学を目指した多くの先輩の方々も、子供心に銀河鉄道で宇宙旅行・・・そんな星座との出会い・感動から天文学という分野にあこがれ、研究にはまってしまった人も多いと思います。私も星のきれいな田舎生まれでしたが、何故かその道は考えたこともありませんでした。それは“空を観るより・・働いてお金を”・・そんな目先しか考えられない時代・環境だったからでしょう。

やがて、仕事以外に「何か？」と考えた時は既に30才後半でした。この時の趣味の中に「変わりもの＝踊り」が一つ増えました。

今回はこの様変わりな踊りに触れてみたいと思います。私の踊りは「新舞踊」といって流行歌を男や女に扮して踊ります。プロがやれば当たり前ですが、一般人が女姿に変身することは常識にはないからでしょう。　観る人は「気持ち悪～い！」とも言ってくれます。

変身前（注：この子は全くの他人です）

変身後

出会いは10年程前、となりのおばさんがいきなり踊り出したのです。私を含め参加者全員その踊りの華麗さに度肝を抜かれました。

その後、その先生に男３人弟子入りしました。この業界？ほとんどが女性です。まして覚えの悪い男３人、１年掛りでようやく１曲覚えたのが「武田節」、踊りとはほど遠く、まるで変な体操でした。“継続は力なり”とか煽てられ、いつの間にかズルズル。他の二人は既に辞め私一人だけになりました。この頃から、今度は「女踊り」にチャレンジしてみました。男と女では姿勢や踊り方が違います。特に和服女姿は歩くだけでもガニ股の私には下半身が壊れそうでした。そんな中で未完成ながらも、ある時同級会で披露したらバカ受け・・・それはたぶん真面目で？不器用人間の私には考えられなかったからでしょう。観客も最初は腹を抱えて笑っていたが、やがて呆れて物言えない状態になっていました。このように時にはおだてられたりして・・ずるずると現在進行形です。ある時女房曰く“こんなバカとは思わなかった”と。

そんな脅迫にも負けず、とやかく言われながら、今も田舎で年に数回チャリティなどに協力させていただいております。寂れる一方の田舎に一人くらいこんな人間がいても良いのではないかと、年と共に羞恥心を失いかけた自分に言い聞かせながら、やがて来る定年後は、老人ホームのボランティア

を目指し、覚えるより忘れる方が早い昨今ですが体操感覚で必死に年齢をくい止めております。

おかげで、レパートリーも数曲、着物もそれなりに増えました。飲み過ぎなど体調不調時の微妙な化粧乗りの良否も体験しました。加えて少しばかり面の皮も厚く？なったかもしれません。(…気を付けなくちゃー！)

一般に年をとると感動が少なくなるようですので、ムリヤリ奇抜な姿を押し売りしています。

もし、何かの機会で目に触れるときは、又始まったなと笑ってください。

やっぱり、天文台ニュースにはふさわしくない話題となったかも知れません。

各人のさまざまな出会いは、自分の生き様にどう作用したのでしょう？　仕事・人間関係・趣味の中にプラス思考（指向）でこれからの人生の糧としたいものです！「人間死ぬまで楽しく生きよう！」

〜合掌〜

編集後記

皆さんはコーヒー党、紅茶派、それとも緑茶主義？私は JPL での長期滞在以来、モカ（コーヒーにココアを混ぜる）の虜になりました。今でもモカを飲むと、研究三昧だった当時を懐かしく思い出します。(F)

三月って、東京の天気が一番不安定な月ではないかしら？春休みなのに、お出かけ計画が立てにくいです。(学生じゃなければ　関係ないか。。。) (C.I.)

現地で買った天文雑誌に「インカの星座」という記事が載っており、それに触発されてインカ帝国と天体のかかわりについてつらつら調べています。インカでは天の川を背景にして見える暗黒雲が星座になっているそうで、星がよく見えるアンデス高地ならではのことだと感激しました。電波観測で見つけた暗黒雲に名前を付けてみるキャンペーンでも組もうかな。(成)

一ヶ月以上前にアメリカで出されたはずの航空便がなぜか今頃届いた。他に特に遅れずに届いたものがあるので、てっきりこれだけ紛失されたと思っていたのだが・・・無くなりもせずに届いたということは、実はずっと船に保管されていた？ (Y.H)

あまりに空気が乾燥するので（自宅のことです)、ついに加湿器を購入した。せっかくなので少しいいのを買おうと思ったら、マイナスイオンとやらがついてくる。こういう機能はいらないんだけどなあ。ついでに見回すと、花粉対策の空気清浄器も多数ある。これはいるかも。憂鬱な春がまた来る。(W.A)

オーストラリアの Mt. Stromlo Observatory が、1 月 19 日に山火事に見舞われました。岡山の望遠鏡と姉妹機にあたる 188cm 鏡も火災にあい、相当な被害を受けたそうです。事務と図書室のある旧館の地下室では、GGP グループが重力変化の連続観測を行っていたのですが、こちらも観測の中断を余儀なくされております。Mt. Stromlo Observatory の一刻も早い復旧を願います。 (Y.T.)

シリーズ

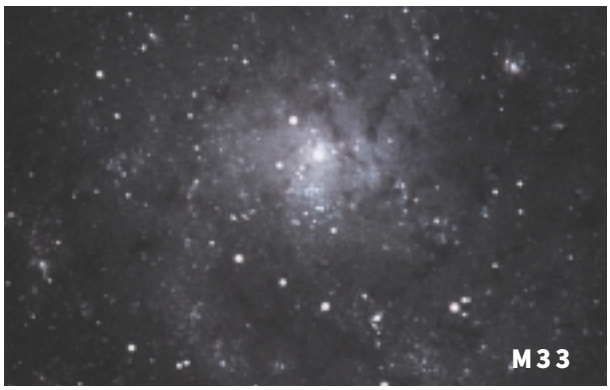
メシエ天体ツアー 9

The Messier Catalog

M33（銀河）さんかく座

我々の銀河系やアンドロメダ銀河 M31、M32 等とともに局部銀河群をなす銀河である。アンドロメダ座β星をはさんでちょうど M31 と対称の位置にあり、双眼鏡でも確認できる。銀河の渦巻きを極の方向から見る「フェイスオン」銀河であり、渦巻きの腕がわかりやすい。その渦巻きの腕の中には星形成が盛んな H Ⅱ（エイチツー）領域が目立ち、写真では青い渦巻きの腕と赤い H Ⅱ領域の対比が美しい。

1764 年にメシエカタログに加えられているが、それ以前から知られていた天体のようだ。

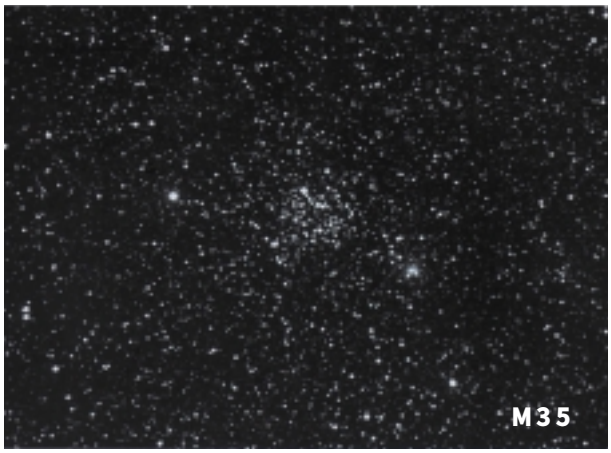


M34（散開星団）ペルセウス座

β星アルゴルのすぐ西側にあり、数十個の星が満月程度の広がりに散らばって見える。1400 光年と比較的近い距離にあり、夜空が暗ければ肉眼でも十分見つけることができる明るい星団である。

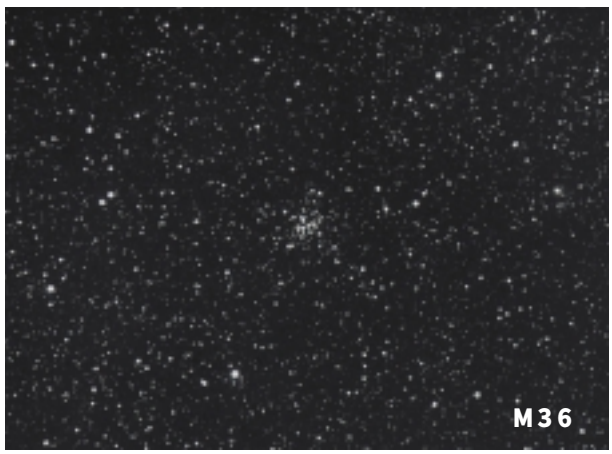
M35（散開星団）ふたご座

ふたご座のカストルの足元にある数百個の星の大集団で、双眼鏡でもたいへん見応えのある星団である。条件がよければ、すぐ側にある散開星団 NGC2158 も確認できる。殆どの星が主系列に属するが、進化の進んだ巨星もいくつか含まれている。



M36（散開星団）ぎょしゃ座

ぎょしゃ座を横切る天の川の中にある散開星団。同じくぎょしゃ座にある散開星団 M37・M38 と並び、双眼鏡で見た姿はどれもよく似ていて区別が付きにくい。M36 はその中でも最もコンパクトに見える。まばらだが明るい星が多く、太陽の数百倍の明るさのものも含まれている。



（広報普及室　教務補佐員　小野智子）

参考：http://www.seds.org/messier/Messier.html